

贈与としてのコミュニケーション

曾 我 千亜紀

Communication as Gift

SOGA Chiaki

Abstract

How does the actual information-oriented society face the issues of resources limitation or ethics while protecting its advantages, such as freedom and diversity? We will try to resolve these issues through a positive thinking process in which we will analyze the concept of information. It is important to analyze nowadays communication as a gift rather than as a well-balanced exchange. Indeed, seeing communication as a gift, and knowing what is given in return, is a process that will show us its new value and its rethought meaning, both ideas that cannot be reduced to necessity or the money economy.

Keywords : Gift, Communication, Information, ethics

キーワード : 贈与, コミュニケーション, 情報, 倫理

1. はじめに

現在の高度な情報化／消費化社会は、様々な問題を内包している。例えば貧困や搾取、南北の格差、資源の有限性といった問題である。しかしながらこれら諸問題を解決するために、資本制システムを根本から転覆させようと企図することはもはや現実的ではないであろう。なぜなら、情報化／消費化社会はその多様性と自由によって人々を惹きつけ、その魅力は欠点を補ってなお余りあるからである。したがって私たちに突きつけられているのは、今ある社会の〈自由〉や〈多様性〉を失うことなく上述の諸問題を解決する途はあ

平成 25 年 10 月 30 日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科准教授

りうるかという問いである。ここで私たちは、見田宗介の提起した高度な情報化／消費化社会における限界をいかに乗り越えるかという問題意識を共有する¹⁾。見田は、情報概念を積極的に捉え直すことが、限界を切り拓く一つの可能性であると主張する。情報概念を再問題化すること、しかも情報を敢えてポジティブなものに見なすことが要請されているのである。このような問題意識は、人々の為している経済活動やコミュニケーションが最低限の生命維持を担うものに留まっていないことこそが実は倫理的な次元へと繋がるという、一見矛盾した側面を支持するように見える。だが、人間を人間たらしめるのは、単なる必要性を超えるもの、いわば奢侈なのである²⁾。情報概念は、合理性や効率性を超えた価値を示しうるのか。以下、社会を真に豊かなものにするために必要となるものを探求していく。

2. 無際限な情報空間

(1) 情報概念

そもそも情報とは一般的にどのように捉えられているのだろうか。実は情報概念を定義することはそれほど容易ではない。情報工学、社会情報学、生物学等々、各分野における定義も異なれば、分野内におけるコンセンサスが成立しているわけでもない³⁾。ここでは情報概念のある重要な一側面に注目したい。それは情報の無際限性である。

有限な資源に対して、ほぼ唯一対抗しうるのが無際限な資源としての情報である⁴⁾。無際限に広がる情報空間において、情報はある種の自立した自己準拠システムによって肥大していく。それが経済と結びつくと、時には歯止めの効かない流れとなる。例えば、人々

1) 見田宗介『定本 見田宗介著作集I：現代社会の理論』岩波書店、p. 3を参照のこと。見田はこの著作において、広い射程を保持しながら現代社会の諸問題を指摘し、それらを解決するための萌芽的なアイデアをいくつも提起している。それらアイデアがすべて展開されているわけではないが、大いに示唆的なその提案を彼の問題意識を受け継ぎながら発展的考察していくことは重要だと考える。この意味において、筆者は見田と同じ出発点に立とうとする。

2) 後に詳述するが、バタイユは「奢侈 (luxe)」すなわち「蕩尽 consumption」こそが人間に根本的問題を突きつけていると考える。Bataille, *La part maudite*, Éditions de Minuit, p. 52 および p. 107 を参照のこと。

3) 例えば、情報工学者シャノンの定義に基づきエントロピーと関わらせて理解されたり、情報 information を語源的に遡り、質料 *matière* に形相 *forme* が与えられること、何らかの系に秩序が与えられることと理解されたりする。しかし、分野横断的に共有されている定義はなく、それぞれかある一つの分野内においてすら情報概念の解釈が異なっているのが現状である。

4) ミシェル・セールの「情報とは「泉」であり、創作は「唯一の永久運動」であるとする (Serres, *Le parasite*, Éditions Grasset et Rasquelle, p. 160)。情報が表現され解釈され伝達されるとき、あたかも汲み尽くせない泉のように情報の無際限性をそこに見ることができるだろう。

が商品を買うとき、有用性や合理性のレベルだけで選択するわけではない。デザインやブランド、伝統や歴史、流行といった付加価値が消費の対象となる。それが行き過ぎれば、金融資本主義における貨幣が貨幣を生むような抽象的な世界が展開される⁵⁾。実体のない価値が膨れ上がっていくのは、価値が事物それ自体に宿っているわけではないからである。事物を取り巻く情報が価値を生成しており、そのうえ情報は無際限に増大しうる。その極端な形態では、事物はもはや必要とされず、抽象的な情報（ここで言えば抽象的な貨幣価値）が独立して肥大していく。

しかし、この極限へと押し進められる情報の性質は一方的に否定されるべきではない。上で述べたように人間は付加価値を消費するが、だからこそフェアトレード商品が成立したりエコロジカルな生産過程が評価されえたりするからだ。差異化をどこまでも展開しうる情報は、いわば限定された資源しか持ち得ない人間にとって唯一の無際限な資源となりうるのである。

本論文では敢えて、このいわば無尽蔵に流出する泉である情報を積極的に捉えることにしたい。そのためには、貨幣経済によって覆い隠されてしまったもう一つの交換の形、すなわち贈与について論じなければならない。実際、私たちのコミュニケーションの根底にあるのは贈与と返礼としての情報と倫理の形なのである。この点を明らかにするために、まずはマルセル・モースによる『贈与論』の議論を見ていく。

(2) 贈 与

モースが『贈与論』において言及しているマオリ族の例は、贈与のシステムを考えるために、しかも情報論と関連させて論ずるために非常に有効である。彼らは霊的な概念「ハウ」を持っている。この霊的概念は贈与された物品に宿るものとして考えられている。引用しよう。

ハウは吹いている風ではありません。全くそのようなものではないのです。仮にあなたがある品物（タオンガ）を所有していて、それを私にくれたとします。あなたはそれを代価なしにくれたとします。私たちはそれを売買ったのではありません。そこで私がしばらく後にその品を第三者に譲ったとします。そしてその人はそのお返し（ウトゥ）として、何かの品（タオンガ）を私にくれます。ところで、彼が私にくれたタオンガは、私が始めにあなたから貰い、次いで彼に与えたタオンガの霊（ハウ）なのです。（あなたのところから来た）タオンガによって私が（彼から）受

5) 米山優『情報学の展開』昭和堂, p. 398.

け取ったタオンガを、私はあなたにお返ししなければなりません⁶⁾。(傍点は引用者による)

「ハウ」を祓うためには返礼をしなければならない。返礼しなければならないと感じるこの「負い目」がいわゆる反対給付義務 (contre-prestation) である。このような義務を果たすために返礼は贈与されてきた道筋を逆に辿り、最終的に贈与と返礼の円環は閉じられる。

重要なのは以下の点である。誰かが反対給付義務を感じるまで、すなわちその物品が〈贈与である〉と認識されるまで、物品は次々と別の人間へと受け渡されていくということ。言い換えれば、その物品を〈贈与である〉と認め、返礼を始める人間が存在して初めて、物品は遡って贈り物であると見なされ、遡及的な返礼が始まるのである。返礼が発端の人間に到達するに至って、循環の輪は閉じられる。こうして「ハウ」は祓われる --- いわば負い目は支払いを完了する。

第二に、返礼は直接なされるわけではなく、必ず第三者あるいはさらに別の人間たちを介することである。もし二人の人間あるいは二つの共同体間で贈与と返礼がなされるならば、単なる事物の交換として終わってしまうであろう。しかし贈与と返礼のネットワークは、三人あるいはそれ以上の人間を巻き込むのである。

モースは返礼を義務として感じ、最終的に円環が閉じられることに意義を見出す。返礼は強制ではなく、例えば法によって規定されるわけではないが、人は返礼せねばならないと感じるのである。ある種の負い目が人を動かす。だからこそ、贈与と返礼は絶え間なく繰り返され、円環が閉じられることによってそこに一つの共同体や社会が生成するのである。

私たちはこのような贈与と返礼のあり方を、情報コミュニケーションと結びつけて発展的に展開することを試みる。だがモースとは異なり、敢えて円環を開いたままにするあり方を考えてみたい。

何らかの主体がある情報を自分に対する贈与だと見なすことによって初めて、情報の送り手と受け手、情報それ自体、情報が生成している場といったものが生まれる。このとき贈与とその返礼の円環は必ずしも閉じられる必要はない。むしろ、情報の受け取りと、返礼としての贈与は、全く別の主体に対して別の場面において行われる方が望ましい。そうでなければこのような交換は容易に貨幣経済に巻き込まれ、従来の価値基準に絡め取られ

6) Mauss, *Essai sur le don : Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques*, L'année sociologique, seconde série, P.U.F., p. 15.

てしまうだろう。円環を取って閉じさせないことで、どこまでも続いていく贈与の連なりが情報を無際限に増殖させる一つの契機となる。そもそも、返礼を自らに何かをもたらしてくれたその相手自身へと返そうとしたところで、それが不可能な場合も少なくない。なぜならば、私たちが贈り物として受け取る情報（それは芸術作品であったり、テキストであったりしよう）の作者は、既に亡いかもせず、しかしながら私たちは彼らに対する感謝の気持ちを抱きながら新たな情報や作品を生み出すことができるからである。このように、情報を贈与として受け取り、そこから別の情報を生み出し、他者へと送る＝贈ることは、コミュニケーションの一つの基盤をなし、情報が行き交うための大きな原動力である。

もう一つ付け加えよう。先に述べた情報生成の場とは、必ずしも物理的空間を指すわけではない。なぜなら、物理的に空間を共有していたとしても、情報を受け取ることのできない主体もありうるからである。そのとき、情報空間は〈複数〉存在することになる。さらに言えば、例えば同じ一つの情報（このように表現しうるかどうかは議論の余地があるが）に対して別の解釈をする可能性もある。いわば、外部から見れば、ある一つの場を共有する複数の主体が存在し、そのうちの一個の主体 A から一つの情報が発信され、それを異なった意味に解釈する諸主体がいるというように見える。しかし実際のところは、B という受け手に対してと、C という受け手に対してと情報は一つではなく〈複数〉存在し、B と C は場を共有しているように見えて、それぞれが異なる場を生成させてしまっているわけである。同じ空間と情報を共有しながら、ある人々は情報＝贈り物を受け取ったと感じ、ある人々は情報を受け取ることができない。ある人々は情報の場を形成し、ある人々は情報の場を作り上げることができない。このような複数性あるいは多元性がいわば無際限の情報空間を開くのである。

このような空間において受け手である B と C は A に直接返礼する必要はなく、返礼としての情報の贈与は、別のグループの中で別の文脈でなされても構わない。情報を情報として受け取ることのできなかつた D や E といった主体は、別のグループで情報の送り手となるかもしれない。あるいは、時間的にずっと後になって、D や E が A の情報を贈与として受けとめることができるかもしれない。情報の贈与と返礼は至るところで生成するが、すべてが必ずしも意識的になされるわけではない。しかしながら生成のこの複数性と多元性が、しかも時間も空間も超える複数性と多元性が、コミュニケーションを豊かにし情報を増大させるのである。

(3) バタイユの〈消費〉

『贈与論』が提起するもう一つの側面は、ポトラッチという、贈与がいわば極限にまで押し進められ事物の破壊にまで至る習俗から引き出される。北西アメリカ原住民が行うポトラッチの奇妙な特徴は、相手に贈り物を与えるだけに留まらず、一旦相手に誇示した品物を破壊し投げ捨ててしまうという点にある⁷⁾。このような破壊行為は有用性や合理性だけでは説明できない。彼らは富を破壊する。バタイユはここに「有用性の彼方の〈消費〉」⁸⁾を見る。

バタイユの言う蕩尽（消費，消尽とも訳される。バタイユ自身は *dépense* あるいは *consumation* といったタームを用いる）は、単なる贅沢を意味するわけではない。確かにバタイユは、禁忌とされる領域を取って侵犯することによる人間の喜びを語る。それはあるときは暴力という形を取り、あるときは蕩尽という形を取る。聖性や至高性を目指すこともあれば、単なる無駄な消費や有害なエネルギーに見えることもある。しかしながら蕩尽は、必ずしも贅を尽くすことに留まらない。むしろ強調すべきは、有用性や合理性という基準では捉えることのできない次元で人間は事物を〈消費〉しうるということである。そのとき、大量生産→大量消費→大量廃棄のサイクルに巻き込まれることなく、事物を消費し尽くすことができるだろう。その意味において人間は資源の枯渇をできる限り遅らせることが可能となる。しかしながらそれを〈消費〉する側からすれば、資源の有限性に立ち向かうことそれ自体を目的としたり義務と感じたりする必要はない。要請されているのは、芸術を鑑賞し、自然を愛で、生きることの喜びを情報の無際限性を生かしながら味わい尽くすことである。

言うまでもなく、情報の無際限性、情報の蕩尽は常にポジティブな側面のみを見せるわけではない。サイバースペースでは、言葉による暴力（それは誹謗中傷や炎上といった形で起こる）が歯止めの効かない形で助長されるといった現象が見られる。先に述べた金融資本主義の暴走もまた実際は同じ構造を持っている。

このような現象を助長するのは、サイバースペース上における身体の希薄性である。より正確に言えば、身体性の忘却である。それゆえ一旦暴走し始めると、言葉が言葉を、情

7) *Ibid.*, p. 10.

8) 見田，前掲書，p. 118 および Bataille, *op.cit.*, p. 107 を参照のこと。ただし問題は、最終的な段階でバタイユ自身が有用性の次元でポトラッチを解釈しているのかのように見えることである。すなわち、蕩尽是結局、後の立場の優位性を目指しているのであって、その意味では物と名誉の引き換え --- ある意味での等価交換と理解されてしまうおそれがある。ただし、ここでの指摘を取って好意的に解釈するのであれば、物の贈与が「評価」や「名誉」に繋がるという、単なる金銭的価値に換算されえない交換の可能性を開いた点を評価できるだろう。

報が情報を生み出し、それらを押しとどめるものがなくなってしまう。次節で検討するが、興味深いのは、一見私たちは理性によって身体をコントロールしているようでありながら、実際のところ、身体が精神のある種の錨であり、理性の行き過ぎを留める役割を果たしているということである。精神も身体も単独では過剰になる。

そうだとすれば、両者をいかに合一させるか、両者が見事に調和する相をどのように実現させるかが問題となる。筆者が提唱する情報体の議論はこの問題に一つの手掛かりを与えうる。

3. 情報体

(1) 二項の区別と合一

情報体とはいかなる概念であるのか。概観しておきたい。この概念はデカルト的二元論を積極的に発展させることによって得られた。すなわち、二元論を単なる二項対立ではなく、二項の区別と合一との両立を目指す理論として捉え直すのである。そのような（一見矛盾するように思われる）二項の区別と合一とが両立している状態を情報体と呼ぶ。例えば精神と身体の区別と両立、情報の物理的側面と意味的側面の区別と両立といったものがそれに相当する。それだけではなく、精神と身体の合一したもの --- 仮に主体と呼ぼう --- と情報との区別と合一、集合体や共同体における個と全体の区別と合一といったものへとこの概念を広げることができる⁹⁾。

さて、情報は商品に付加価値を与えることができ、人々はそれに対して対価を支払うことを厭わない。商品は情報体として事物的側面と意味的側面を担いつつ流通する。既に見たように私たちは、事物に対するそのような接し方が、近代性に由来するものではないことを知っている。情報の与える付加価値はマオリ族における「ハウ」に相当し、現代社会は「ハウ」に満ち満ちているとも言えるのである。

逆に言えば、人々と関わることのない打ち捨てられた事物にハウは宿らない。もし、何らかの石に対して注意を払う人間が誰一人いなければ、その石は情報体ではない。しかし、その石に対して何らかの付加価値を見出したり（例えば思い出の地と結びつける）、その存在の特殊性を認めたりする（例えば宗教的意義を見出す）のであれば、そのとき石は情報体へと変容する。事態はテキストや芸術作品であっても同様である。誰も読まないテキスト、誰からも忘れ去られた芸術作品は、それ自体価値を内包し情報体として存在してい

9) 情報体の事物（身体）的側面と意味（精神）的側面については、拙論『情報体の哲学』の第一章を参照のこと。

るわけではない。その物理的側面と意味的側面の二項を合わせて捉えることによって生ずるのが情報体というあり方なのだ。

(2) 身体的重要性

情報の蕩尽の均衡を図るために、精神と身体の二項を併せ持つという点を強調することができよう。情報が思想や意味を、価値についての議論を置き去りにして暴走すること¹⁰⁾は、見田がその縮小を願う貧富の格差を広げてしまう。これは一見、事物的な側面（身体的側面）の暴走のように見えて、実際は、意味的側面（精神的側面）の暴走なのである。制作や製作という身体性から切り離されて商品は流通する。当初の価値以上のものをそこに付与するのはまさに行き過ぎた精神の力なのである。しかしながら、商品がまとう身体性、情報がまとう身体性を捉え直すことによって、暴走の歯止めがなされるのである。

中沢新一はこのような暴走を食い止めるため、自然（それは人間に純粋な贈与をなす存在である）との関わり方の見直しを提唱する¹¹⁾。「愛」をもって自然と接すること。「愛」とは要するに、合理的な経済における交換原理では捉え切れない人々の心性であり傾向である。「愛」は返礼であり尊重であり贈与である。精神をつなぎ止める身体性を纏ったりアルと接続するために、中沢は敢えて経済における愛を語り、倫理のある一つの形を提起する¹²⁾。

ただし注意しなければならないのは、身体的なものもまた意味的側面や精神的働きの介入を容易に許してしまうことである。例えば、食は非常に身体的な活動であるかのように思われるが、精神が食欲にいかにか影響するかを私たちは身を以て知っている。そもそも、身体的活動や身体に起こる現象を精神の働きから峻別し、身体を身体として位置づけることがデカルトの『情念論』¹³⁾の狙いであった。デカルト的二元論を出発点として情報体を考える立場からは、商品であれ、芸術作品であれ、テキストを読むことであれ、食べたり飲んだりすることであれ、すべてに事物（身体）と意味（精神）の側面が関わっていると。重要なのは、両者の区別をしつつ、均衡をはかることである。たとえバタイユが禁忌を犯すほどのエネルギーを解放することが人間だと主張したとしても、そのようなエネルギーの方向性を統御すること（canaliser）が求められる。それこそがさらに人間的であり、贈与に基づく倫理を形作っていくことだろう。

10) 米山、前掲書、p. 398.

11) 中沢新一『愛と経済のロゴス』講談社、pp. 144-160.

12) 中沢新一『対称性人類学』講談社、第八章を参照のこと。中沢はここで、バタイユの提唱した「普遍経済学」を対称性という彼独自の視点から読み解いてみせる。

13) Descartes, *Les passions de l'âme*, AT, XI.

4. 贈与を基礎とするコミュニケーション

(1) サイバースペースの倫理

情報は一人で抱え込んでいても私たちに何ももたらさない。それはボールゲームの比喻によって理解される。セールやピエール・レヴィは、サッカーやラグビーのボールを情報に喩える¹⁴⁾。ボールはゴールされねばならないという大きな目標をまとっているが、だからといって選手は闇雲にシュートを放つことはしない。相互になされるパスは、情報が次々と受け渡され、ネットワークを形成していくことを暗示している。また、ボールが誰か一人の選手によって占有されてはゲームが成り立たない。まさに情報は送られねばならず、贈与されねばならないのである。また、ここでのボールはあくまでも情報の比喻であることに注意せねばならない。なぜなら、ボールはいわば物体としてそこにあり、ほぼ変化することなく受け渡されていくが、情報はその姿自体を変えながらネットワークを移動していくからである。情報は受け渡されながら、受け手や送り手の関与によってその意味や姿が変化する。しかしながらそのような変化もまた次の受け手や送り手に対する贈与となるのだ。

サイバースペース上で罵詈雑言が書き捨てられたり、およそ意味のない書き込みが繰り返されたりすることがある。だがそのような情報を贈り物として受け取ってくれる他者はおそらく一切現れないであろう。贈与が成立しない（受け手が現れない）ということは、まさにマオリ族のハウのように、そのような情報の書き手を蝕む。ハウは祓われぬ。なぜなら、彼（女）らの発言は、常にノイズとして処理され、今後の贈与や返礼へと繋がる情報とは見なされないからである。彼（女）らの発言は、決してネットワークを形成することもなく、贈与と返礼のシステムに組み込まれることもない。自ら情報ネットワークの豊かさに背を向けてしまっている。

これはまさに情報の倫理の一側面を表している。もし人々が無際限の情報空間の恩恵に与りたいと願うのであれば、情報を贈与と見なし返礼をするという礼儀作法 *civilité* を身につけねばならない。情報空間の恩恵は単なる利潤や合理性を意味しない。むしろ有用性や効率性とは程遠い何ものかを得ることを意味しよう。だがそれは確かに私たちを豊かにするのである。

情報は退蔵されても一方的に送られても、豊かなネットワークを形成することはできない。贈り物は受け取られねばならないし、返礼もされねばならない。無駄や過剰を廃する

14) Serres, *Le parasite*, Éditions Grasset et Fasquelle, p. 303. および Lévy, *Qu'est-ce que le virtuel ?*, La Découverte, pp. 119-122 を参照のこと。

ばかりでもいけないし、利益を占有してもならない。まさに「修道士の生活も、シャイロックの生活も避けなければならない」¹⁵⁾のである。それらはしかし、私たちの世界の〈多様性〉と〈自由〉の根源なのである。

人間は必要性のみに支えられて生きているわけではない。生命維持は人間の基盤ではあるが、人間的な精神と身体とを駆動するのは、一見不必要なものの蕩尽にある。言い換えれば、芸術やコミュニケーションが人間性を担保するのである。人類学的見地に従えば、人間と他の動物とを分かつのは、例えば葬儀、祭祀、芸術等々である。普通物事は効率的に運ばれることが目指されるし、情報に関しても同様である。無駄を省き効率性を図ることは、一見、非常に理性的な目標のように思われる。しかしながら効率性や合理性のみを押し進めることは、実のところ、最も人間的な部分を失うことでもある。むしろすぐには意図のわからない行動や事象、効率性や合理性の敵と思われる事柄にこそ人間性の鍵が隠されている。

芸術は、もし経済活動に関わるのであれば、否応なしに貨幣経済へと巻き込まれ、好むと好まざるとにかかわらずある一定の貨幣価値を付与されてしまうだろう。だがその価値は芸術を構成する一要素に過ぎず、贈与の枠組みの中で考えれば、先人の贈り物を受け取り返礼するというコミュニケーションの流れの中に位置づけられる。それは、貨幣による価値づけとは全く別の次元で起こり、制作者や鑑賞者を駆動する。貨幣によって見えにくくなってはいるが、人間を動かすのは目に見える利益だけではない。根源的なのはむしろ贈与である。

(2) 贈与—返礼システムにおける相互的修習

レヴィの提唱する相互的修習の考え方もまた、このような贈与の枠組みで理解することができよう。レヴィは自己と他者との間に生ずるコミュニケーションを相互に教え教えられるという関係によって説明する¹⁶⁾。そのとき、その倫理的側面を担保するために知を退蔵しないこと、他者から何かを教わったら金銭によってではなく、誰かに何かを教えることによって返礼することを義務づけようとする。この相互的修習を最も卑俗な形で理解すると、誰かに何かを教わったらお返しにその相手にも何かを教えるという非常に限定された等価交換図式が生じてしまう。しかしながら、情報を贈与として受け取りそれを全く別

15) Mauss, *op.cit.*, p. 93.

16) Authier et Lévy, *Les arbres de connaissances*, La Découverteを参照のこと。オティエとレヴィは、第一部において具体的な場面での相互的修習とその評価について、第二部において「知識の樹 (arbres de connaissances, 知恵の樹とも訳される)」の全体像、すなわちその原理とシステムや効果について述べている。

の他者へと（それは時代をも空間をも軽々と超越するような他者である）返礼することによって、相互的修習の円環は閉じることなく、無限に広がっていく。

5. おわりに

以上のように、情報を無際限に湧出する資源として捉え直すことが、現代社会の抱える矛盾を解消する端緒となる。それによって、貨幣経済システムに覆い尽くされ見えなくなってしまったコミュニケーションのもう一つの形を取り戻すことができる。しかも、より発展した形で取り戻すことができるのである。無際限に広がる情報空間が、我々に新たな倫理の可能性を示すことであろう。贈与は、ささやかではあるが確かに、我々のうちに豊かなコミュニケーションを涵養するのである。

ただし、贈与を貨幣とは異なる基準でいかに評価するのかという問題は残る。今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 清水高志『来るべき思想史』, 冬弓舎, 2009年
- 2) 曾我千亜紀『情報体の哲学:二元論再考の視点からみたサイバースペースにおける知の創造』, 博士論文, 名古屋大学, 2012年
- 3) 中沢新一『愛と経済のロゴス』, 講談社, 2003年
- 4) 中沢新一『対称性人類学』, 講談社, 2004年
- 5) 見田宗介『定本 見田宗介著作集 I: 現代社会の理論』, 岩波書店, 2011年
- 6) 米山優『情報学の展開』, 昭和堂, 2011年
- 7) Bataille, G. *La part maudite*, Éditions de Minuit, 1949. (バタイユ『呪われた部分』生田耕作訳, 二見書房, 1973年)
- 8) Baudrillard, J. *La société de consommation*, Éditions Planète, 1970. (ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司・塚原史訳, 紀伊國屋書店, 1979年)
- 9) Descartes, R. *Les passions de l'âme*, 1649. (Adam et Tannery, *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, Paris, 1897-1909, vol. IX.)
- 10) Lévy, P. *L'intelligence collective*, La Découverte, 1994.
- 11) Lévy, P. *Qu'est-ce que le virtuel ?*, La Découverte, 1995. (レヴィ『ヴァーチャルとは何か?』米山優監訳, 昭和堂, 2006年)
- 12) Authier, M. et Lévy, P. *Les arbres de connaissances*, La Découverte, 1998.

- 13) Mauss, M. *Essai sur le don : Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques*, L'année sociologique, seconde série, P.U.F., 1923-1924. (モース『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳, ちくま学芸文庫, 2009年)
- 14) Serres, M. *Le parasite*, Éditions Grasset et Fasquelle, 1980. (セール『パラジット: 奇食者の論理』及川馥・米山親能訳, 法政大学出版局, 1987年)